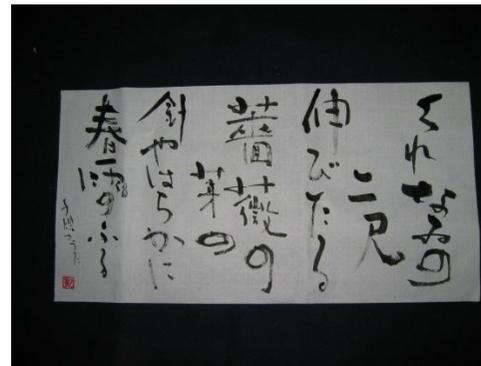


第121回愛知学院大学モーニングセミナー

「短歌と和歌の違いをご存知ですか？」
～五・七・五・七・七の心を楽しむ～

愛知淑徳大学 学長 島田 修三 先生

見わたせば 藤原定家
見わたせば 藤原定家
花も紅葉もなかりけり
花も紅葉もなかりけり
浦の苫屋の
浦の苫屋の
秋の夕暮
秋の夕暮



2016年4月12日

「1」正岡子規の王朝和歌攻撃

① 貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候。其貫之を崇拜するは誠に気の知れぬことと……（「再び歌よみに与ふる書」明31・2/14「日本」）

② 「空に知られぬ雪」とは駄洒落にて候（同右）

③ 「心あてに折らばや折らむ……」（この躬（み）恒（つね）の歌百人一首にもあれば誰も口ずさみ候へども一文半文のわうちも無之駄歌に御座候。此歌は嘘の趣向なり、初霜が置いた位で白菊が見えなくなる氣遣無之候（中略）それはつまらぬ嘘なるが故につまらぬにて、上手な嘘は面白く候（同右2/23）

「2」季節歌の伝統

④ 桜ちる木（こ）の下風は寒からうで空に知られぬ雪ぞ降りける（紀貫之 拾遺1・春六四）

⑤ 心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花（凡河内躬恒 古今5・秋二七七）

*④、⑤ともに「見立て」という一首の喩法によって多層的な美を演出（子規の読みとは異なる趣向）

*このういう季節の歌は万葉以来の伝統の蓄積に立っている

⑥ 見渡せば春日の野辺に霞立ち味きにほへるは桜花かも（作者未詳 万葉10・春雑歌一八七二）

⑦ さ牡鹿の朝立つ野辺の秋萩に玉と見るまで置ける白露（大伴家持 万葉8・秋雑歌一五九八）

*③、④のような季節雑歌が奈良朝廷・平城貴族の間で量産される

「3」季節の宴から王朝美意識の形成へ

⑧ 梅の花今盛りなり思ふとちかざしにしてな今盛りなり（葛井（ふじい）の大成（おおなり） 万葉5・八二〇）

⑨ 梅の花咲きたる園の青柳をかげつらにつつ遊び暮らさな（土師（はにの）百村（ももむら） 同5・八二五）

*かざし・かげつら＝神を迎える巫女の装束、遊び＝本来は神に仕える意

*季節歌の龐大な蓄積から「本意（ほんい）」という歌と美の規範が形成される

⑩ ほととぎす鳴くや五月のあやめ草あやめも知らぬ恋もするかな（読入しらず 古今11・恋四六九）

⑪ 見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の古屋（とまや）の秋の夕暮（藤原定家 新古今4・秋三六三）

「4」和歌的幻想の崩壊、個の視線（新派和歌＝近代短歌の出現）

⑫ 冬（ふゆ）もい病の床のガラス戸の曇りぬべへば足袋干せる見ゆ（正岡子規 明33作「竹の里歌」）

⑬ くれなゐの二尺のびたる薔薇の芽の針やはらかに春雨の降る（同右）

⑭ 春みじかし何に不滅の命とぞちからある乳（ち）を手にさへうせぬ（与謝野晶子 明34作「みだれ髪」）

⑮ めん鶏ら砂あび居たれひつそりと剃刀（かみそり）研入（とぎ）は過ぎ行きにけり（斎藤茂吉 大2作「赤光」）